

ど、気持ちを込めて絵をかいた。

楽しい楽器のでき上がりだ。パチを作って、思い思いに、かき鳴らして帰っていった。家でドレミをみつけて、自分でひけるようになった子もいる。

忘れられない思い出

わたしが小学校5年の時、廃材で、乗って遊べる車を作った事が、記憶にしっかり残っている。車輪は、廃品回収の作業場にグループで、もらいに行った。うば車の車輪を使ったと思う。のこぎりも、かなづちも、使うのは、初めてだったと思う。縦びき、横びきの事も教えてもらった。むずか

しい所は、きっと先生に手伝ってもらいながら、作ったのだと思う。カーテンを付けたり、屋根をつけたりした。みんなで工夫して作った。体育館の横で、何日もかけて、わくわくしながら作った。

でき上がった車は、思うように曲がれないし、ガタガタゆれるし、時々倒れそうになるようなものだったが、満足していた。

「わたしは、のこ切りもかなづちも使えるようになった。」という自信ができて、グンと成長したような気がしていた。

図工の時間は楽しみで、絵や、粘土も好きだったけれど、この体験と気持ちは別物で、忘れられない。

特集

「工作」・「もの作り」教育を考える

現代の子どもたちにとっての工作教育を考える

情報化の進展にはめまぐるしいものがあります。私の身の回りでも数年前には考えられなかった状況が生まれています。インターネットはつなぎっぱなしでも電話料込みで数千円ですむというADSLの出現にはまだ実感が伴わず、つい切断してしまう状態です。カーナビにも驚かされます。自分の位置が常にわかるのですから。目的地に向けてうるさいくらいに細かく教えてくれますから、地図を見なくなりました。カメラ付きの携帯電話にも感心します。こういった変化はこの先どうなるのでしょうか。

和光中学高校 森 下 大 一 期
一方で、最近知った木工のサークルの広がりには驚いています。雑誌やインターネットで知ったのですが、TAMA CRAFTという木材加工の機械や治具、組み立てキットの販売もし、木工教室も開いているクラブですが、全国に2000名の会員がいると言います。もちろん、僕のような教師もいますが、大半はいわゆる愛好者です。インターネットを検索していくと、他にもいろいろなサークルがあります。ログハウス関係もありますし、ナイフなどの金属も含めるとさらに多くのものがあるでしょう。陶芸や染色・織りとなればもっと関わっている人・

日本にDIY店が誕生して約30年。DIYは産業として毎年着実な発展を遂げ、平成13年度には総売上高3兆8,060億円に達しました。その目覚ましい発展ぶりを主要データでご紹介します。

〈日本のDIY産業／年間総売上高とホームセンター数の推移〉

年度末	昭和48年	49年	50年	51年	52年	53年	54年	55年	56年	57年
億 円	110	300	720	1560	2450	3150	3850	4690	5600	6720
店舗数	28	60	120	240	350	450	550	670	880	1050
年度末	58年	59年	60年	61年	62年	63年	平成1年	2年	3年	4年
億 円	8130	9326	10500	12000	13500	15000	18000	20500	22000	25000
店舗数	1220	1340	1450	1600	1720	1850	2050	2250	2400	2580
年度末	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	
億 円	27000	29200	31500	33000	34320	35350	36500	37500	38060	
店舗数	2750	2950	3150	3280	3430	3550	3650	3730	3780	

愛好家は多くなると思います。以前より増えているのかどうかデータはないのですが、ホームセンターは確実に増えているように思います。20kmくらいの私の通勤経路にまあまあ大きさのホームセンターが3軒あります。ちょっと脇に出ると知っているだけで3軒あります。私が最近作業を始めた所で木材などを調達するときは、長野県富士見町と山梨県長坂町にあるJマートというところに行きますが、ものすごく大きなホームセンターです。この二カ所は35kmくらいしか離れていません。

私の実感として、大人が様々な素材を使って加工することが一時期より増えているのではないかと、という気がするのです。それを確かめるため、インターネットで日本DIY協会のホームページを検索してみたら、次のようにはっきりその傾向を確認することができました（上資料参照）。

もうかれこれ20年ほど前になりますが、手労研の全国大会の基調報告でアルビン・トフラーの『第三の波』を取り上げたことがあります。脱工業化社会になり情報化が進展する中で、補償（完）作用としてDIY（Do It Yourself いわゆる日曜大工）が広がる、とあったことを取り上げました。その時は“補償（完）”という言葉にこだわったのですが（単に操作化した業務、生活に対する“補償（完）”という意味だけでなく、人間の本質的な欲求としてモノへ働きかけることがあるだろう、といった趣旨でした）、事態は指摘されていたようになっていると思います。

当時の考えにこだわるつもりはないのですが、このように自分で手を下して何かを作り上げるDIYが広がっているのは、私は、週休2日制など、労働時間の短縮が大きく影響しているのではないかと思います。高

度成長期にはそんな余裕もなく追いまくられていたのではないのでしょうか。もちろん、未だ過労死、サービス残業が問題となるような場面も少なくないと思いますが、経済の停滞・不況も相まって、自由にできる時間も確保されるようになったと思います。

ですから、できるところは自分の手でやる——半加工品も数多く出回っているように思います——ということが広がってきているのではないのでしょうか。人間は一方で既製品で簡単にすます、という方向と、自分で手を加えて満足感を感じたり納得する、という方向とが、その置かれている状況に応じ、またその人個人の感じ方によって同居しているように思います。

さて、そういったことも踏まえながら、児童期における工作教育について考えたいと思います。児童期に学ぶことは、それ以降の学びの基礎となるものであるとともに生活に生かすことのできる事柄です。そして、その学びが喜びと発見をとまなう豊かなものであることが期待されます。私は、工作教育が現代の科学技術を担う力を養う技術教育の基礎、と単純には考えません。その視点を全く無くしてはだめですが、子どもが取り組みを楽しみ、喜びを感じるものでなければいけないと思います。同時に、現実の生活の中で活用し得る技であることも必要だと思います。特に、この後者についてより強調したいと思います。前段で述べました観点を入れると、工作教育の中で学ぶものはその時の生活を豊かにすることもできるし、その後の生活でもそれを基礎にふくらませて活用できるものとなるべき

です。生活に使える、役立つ、ということをもっと前面に出していったよいのではないのでしょうか。

なぜこのようなことを書くかということ、技術教育というと生産技術教育が強調され、生活に矮小化されることを警戒する見解がかなり強く存在しました。その生活が消費生活として現在の使い捨てる消費文化に押しとどめられていることが問題視されていたように思います。私は、生産技術教育につながる部分を否定する気は全く無いし、その側面も大事だと思いますが、工作教育で学ぶことがそのまま生活に役立つのだ、ということももっと強調されてよいように思うのです。私などは、かつては、道具の構造とか使用法の理解が機械の仕組みの理解に役立つ……と、無理に生産技術に結びつけていたように思います。それもあっても、自分の身の回りで必要なものをつくる上で、合理的な使用法を身につけることは有益だし、そのためにも仕組みを正しく知る必要もある、さらには現代の機械を理解する基礎となるとつなげていくとよいのではないのでしょうか。

この“生活”にはかなり広いものを含めています。遊びも子どもにとっての重要な生活ですから、遊び道具も大切な教材です。自分だけでなく、家族の生活に役に立つ、という視点もあります。

このように考えると、いわゆる造形遊びは、工作教育とは縁遠い物と考えざるを得ません。何ら生活に役に立たず、何も生み出さず、生産技術には全く無縁のものだからです。